滋賀県日野川ダムにおけるフナ捕食被害とその対策方針の大転換

高木憲太郎（バードリサーチ）

関西広域連合では、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、和歌山県、徳島県の6都府県の範囲のカワウによる被害を減らしていく取り組みが進められており、カワウ対策は府県・市町村が中心となって実施していくという方針がとられている。カワウの管理にあたっては、被害現場の状況を正しく捉え、その場所に合った管理方針を立てることが必要になる。そこで関西広域連合では、被害現場ごとの管理方針を組み立てるための支援として、カワウの管理に詳しい専門家の派遣を行っている。

個体数が急増した近所のコロニー

平成２７年度に実施された専門家の派遣先のひとつが、滋賀県の日野川ダムであった。日野川ダムでは、フナ釣りが盛んで、フナ釣りを対象とした漁協があるが、放流したフナが食べられてしまう漁業被害が発生していた。日野川ダムから数kmの距離にある大正池にはカワウのコロニーがあり、毎年銃器捕獲により200羽から300羽ほどカワウを捕獲していたが、近年、個体数が急に増加し、約1000羽のカワウが生息していた。隣接するカワウのコロニーと、比較的面積の広いダム湖のフナ釣り場。これをどう管理していくべきか、専門家として招聘した野生動物保護管理事務所の加藤洋氏と共に考えていくことになった。

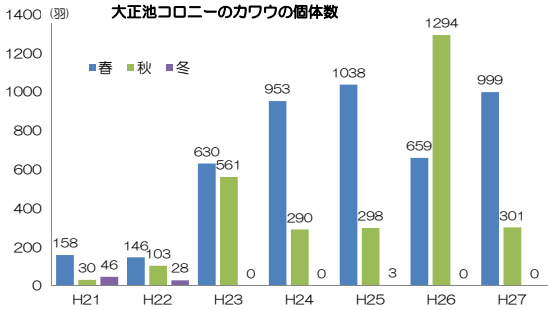

図１．大正池コロニーのカワウの個体数

威力を発揮した飛来数調査

専門家の派遣は、２度にわけて行い、初回は現地の視察とカワウ対策や管理の考え方についての講演を行った。そして、この場所での被害の状況などについて、漁協の方たちの話を聞き、今後の管理の方向性について考えるわけだが、そこで、思いがけないカレンダーに出会った。

日野町漁協では、毎日ダム湖に飛来するカワウの数を記録していたのだ。もちろん、個体の出入りがあるため、正確な数値ではないが、日によるカワウの飛来状況の変化を把握することができる。そこで、３年分の飛来数を記録したカレンダーを持ち

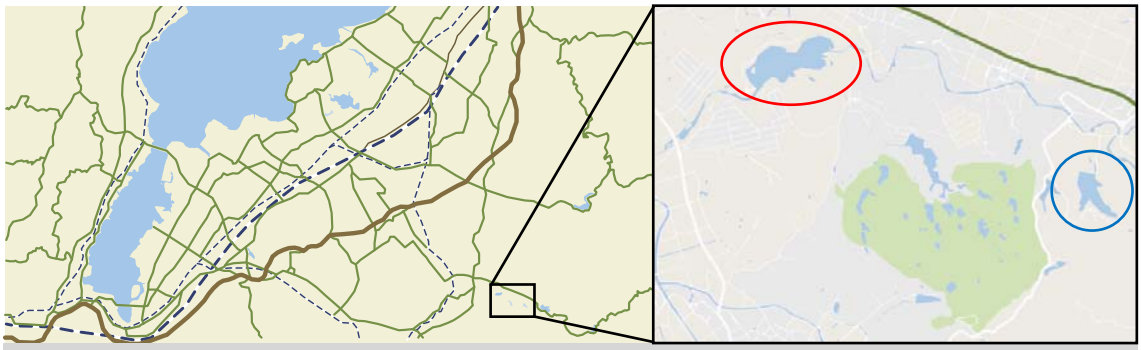

図２．日野川ダムの位置（○赤丸）と大正池コロニーの位置（○青丸）

帰り、データ化することにした。すると、日野川ダムに飛来するカワウの個体数の季節変化やおよその飛来数が見えてきた。冬から春にかけて飛来数が多く、しかも年々その時期が早くなっていること、ダブルカウントも含まれているだろう値でも、多い月で日平均40羽、6月から11月までは10羽程度と少ないことが分かった。

図3．日野川ダムでカワウの飛来数を記録していたカレンダーの一部．毎日確認したカワウの数を１羽ずつ数えて記録し、合計の数を○の中に数字で記入してあった．
データ提供：日野町漁協

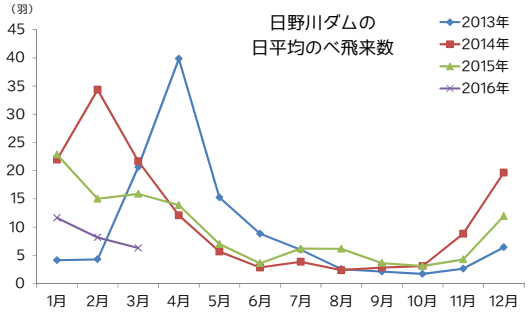

図4．飛来数カレンダーから起こした日野川ダムへの日平均のべ飛来数の月毎の変化．冬から春にかけて飛来数が多く、しかも年々その時期が早くなっていた．

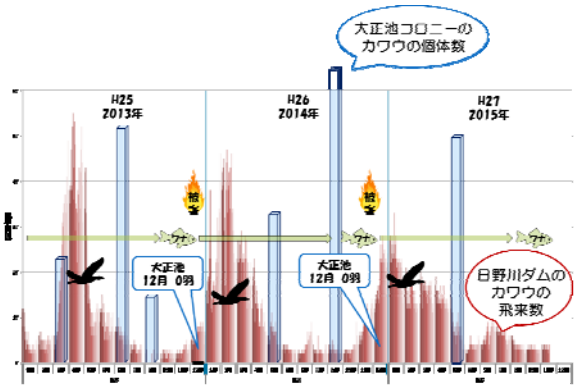

図5．大正池コロニーで生息数が増える時期と日野川ダムにカワウが飛来する時期がずれている．

現場に足を運んで状況を把握すること

滋賀県の担当者も、おそらくは日野町の担当者も、規模の大きい大正池コロニーから近い日野川ダムでの漁業被害については、大正池での個体数調整を実施することによって、生息数を減らす対策が必要だと考えていたようだった。我々もそうした対策の必要性をイメージしていた。しかし、漁協がつけていたカワウの飛来数の記録から、大正池コロニーから日野川ダムに飛来するカワウは日に10羽程度と少なく、1000羽以上いるコロニーのカワウをいくら殺しても飛来数の削減には直結しないこと、日野川ダムに飛来が多い冬の時期は、大正池にはカワウはいないため、よそのねぐらから飛来していることがわかった。

この結果をもとに、2回目の専門家の派遣では、日野川ダムでできる対策について、グループワークを実施した。具体的な対策を決定するまでには至らなかったものの、大正池にだけ注目していては問題が解決しないことを関係者の間で共有ができ、議論の中から、撃たれて飛べなくなったカワウが居ついていて、そのカワウが他のカワウを誘引している問題などが浮き彫りになった。被害を減らすために必要な対策の方針は、当初思い描いていたものとは、まるで違うものだった。都道府県全体を一度に把握するのは難しく、ついカワウの生息数などの情報だけで計画を考えてしまうが、現場を見れば、対策の方向性が見えてくる、ということを示した事例だった。